

(1)探究活動の問い	海外の有名なお祭りに人が大勢集まる理由を調査することで、地域のお祭りを活性化するための新しいアイデアを見つけることができるのか？
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え	とにかく物が大きく、見ている人が思わず息をのんでしまうような驚きに満ち溢れたもので、それがインターネットなどのSNSで紹介されるほどの有名なお祭りになる要因であると考えます。
(3)問いに対して実際にいった活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前 探究活動として地域の活性化のために海外のお祭りを調べると決めたため、イギリスのノッティングヒルカーニバルとエディンバラフェスティバルについて調べる事にしました。なぜイギリスのお祭りを選んだかという英語の塾の先生からのアドバイスです。私自身も最初はどこの国のお祭りについて調べるか迷っており、塾の先生に相談しました。そこで先生が「では、イギリスのお祭りを調べてみてはどうですか。イギリスの方々の性格は日本人の性格と近いものがありますから、文化やお祭りといった行事での好みに近いかもしれません。」と仰いました。そう教えていただいたので私はイギリスのお祭りを調べる事に決めました。 ノッティングヒルカーニバルはロンドンの中のノッティングヒル地域で行われるため、バスなどの移動で問題はなかったのですが、エディンバラフェスティバルはスコットランドのエディンバラで開催されるお祭りなので、飛行機の予約が必要であり、且つエディンバラフェスティバルに参加すること自体が予約を必要とするお祭りでした。そのため私はロンドンのガトウィック空港からエディンバラ空港の往復券とエディンバラフェスティバルの予約を行いました。他にも、エディンバラでは飛行機の都合上1泊2日する予定になってしまったので、エディンバラのホテルを予約しました。
	②留学中 留学前の事前研修の課題で考えておいたインタビューの質問を、ホストマザーやロンドンの方にすることになりました。最初の質問は「エディンバラフェスティバルとノッティングヒルカーニバルを知っていますか？」という質問なのですが、ホストマザーの方は私がこの質問をする前に「イギリスに来たならぜひいっておきなさい」とエディンバラフェスティバルを紹介してくれました。エディンバラフェスティバルのイギリスでの知名度の高さを認識することができました。その流れで私は他の質問をすることにしました。次の質問は「どうやってエディンバラフェスティバルを知りましたか？」という質問をしました。ホストマザーの方は、「旦那さんに連れて行ってもらった。私は生まれはイギリスの生まれではなく、よく知らなかったけどとても楽しかった。」とっていました。ノッティングヒルカーニバルについての話を聞いたときは、とても楽しく話してくれました。「カーニバルを見ながら自分達も踊って歌って楽しむお祭りだ。」とも話してくれました。自分は日本という盆地に近いものだと想像しました。 エディンバラフェスティバルの当日になり、空港からバスでお祭りが行われる町まで向かいました。町はとても賑わっていました。会場が開放されるまでかなり時間がありました。それにしても「多い」と思っていました。「これがこの町では普通なのか」と疑問に思い、ネット調べて、普段のエディンバラの町の様子の写真を見てみました。人がいないわけでもないのですが、今よりもっと少なく見えました。疑問は募るばかりでたまたま入ったお店の店員さんに「なぜこんなに人が多いのか」と聞いてみましたが、「お祭りの影響だよ」といわれ、「でも会場はまだ開いていないですよ」と返したところ「会場以外でも大道芸や音楽など色々あるんだよ」と言われました。私が勘違いをしていたのがわかりました。私はエディンバラフェスティバルは、設けられた会場の中で舞台や音楽隊が演奏するお祭りだと思っていたのですが、実際はエディンバラ城とエディンバラ・オールド・タウンでいろいろな催しをするお祭りでした。町にはその路上で行われるお祭りのポスターでびっしりでした。
	③留学後 留学中にノッティングヒルカーニバルやエディンバラフェスティバルの、私達の町にはない、よりお祭りを視覚的な楽しめる要素が増える工夫をしているところを写真に収めていました。留学後はまず、その写真の自分が思った要素の言語化から始めました。 1つ目が、エディンバラフェスティバルにいった際に見つけた物として、ポスターの「主張の激しさ」があります。主張の激しさというのは、ポスターに使用されている写真についてのことです。一つのポスターの中に同じ人物の顔が3枚使用されていました。そしてそのどれもが、コメディータッチな面白おかしい顔で思わず止まってじっくり見たくくなるような気持ちにさせてくれるものでした。また、主張の激しさはポスターに使われている原色系の色からもわかりました。 2つ目のポスター関連の工夫としては、エディンバラフェスティバル期間中に行われるミリタリー・タトゥーという軍の音楽隊が演奏する催し物がありました。それはエディンバラフェスティバルの中でも目玉に近い催し物であるからか、町の中にある20メートルおきに配置されている全てのポールの先端にポスターが取り付けられていました。「数の多さ」で目を引く工夫がされていました。 3つ目は、ミリタリー・タトゥー以外の催し物にはポスターを貼っていない場所があらかじめ決められていました。その場所では特に決まったポスターはないのか元々何か別の催し物のポスターが張られていたポスターの上から、自分たちの催しのポスターを貼るという「主張の強さ」がうかがえました。
(4)問いに対する答え	今、私の地区でお祭りを盛り上げる上で足りないと感じる一番の要因は、宣伝です。私達の地区でのお祭りの宣伝方法といえば、回覧板で日時、場所、時間等、お祭りの概要だけを載せていたり、お祭りに参加する子供や青年団の方々が地区で家々を回り、呼びかけをする程度です。それでは盛り上がりを起こそうと思っても、規模が小さく、さほど盛り上がりを起こすことはできません。私がイギリスで見たお祭りの宣伝は前述した通り、それだけ自分達が行う催しの熱意をポスター等で伝えることができました。だからこそ我々もそれだけの熱意の表れとして宣伝の仕方に力を入れるべきだと考えます。 そして、次に盛り上げる上で重要だと感じる要因は、飽きさせないことです。宣伝で、人が多く集まったとしても演目に飽きてしまい、集まった人が帰ってしまえば頭張りか無駄になるかもしれません。だから、観客を飽きさせないこともお祭りを盛り上げる上で重要だと考えます。見ている人を飽きさせない工夫としてエディンバラフェスティバルのミリタリー・タトゥーで行われていたように、誰も予想ができないことをすることです。最初に音楽隊の行進が終わったら、お祭りの開催が告げられるのですが、それと同時に戦闘機が飛んできて色つきの雲をつくりました。お祭りの最初にこのような驚きがあるとこの後が気になるので、わくわくさせ、飽きさせないことがことが重要だと感じました。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと	私は、これまでの人生で大事な行事の時や緊張が強すぎた時によくおなかを壊したり、体調崩していました。そして今回の活動は、大事なイベント、且つとても緊張する事であったので、家族から胃腸炎などをもらっていました。他にも、活動中に一番怖いことはスマホ、財布、身分証などをなくしてしまい、今後の活動が続行不可能になってしまったり、帰国できなくなってしまう可能性があることだと思えます。それに場所は海外であり、治安が日本よりも悪い場所での活動となるので、心配してしまうのは必然でした。しかし、こまめに荷物の確認を行うなど警戒心が高め、盗難されずすみました。 活動中にうまくいったことは、調査したいとお祭りを無事に調査できたことです。エディンバラフェスティバルに関しては、予約時間に行くこと、且つロンドンから離れたスコットランドへの移動しなくてはいけないため、もし見ることができなかつたら留学中には二度と見ることができないので予定通りに行くことができて良かったです。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。	留学中にうまくできなかった事は、最初の週間にアクティブな活動ができなかった事です。なぜ、アクティブに活動ができなかったかと言いますと、ホームシックでメンタル的に弱くなってしまい、活動することがまったくできなかったからです。留学に行く前は、海外に行き活動することを、不安はありつつも楽しみにしていました。しかしいざ、イギリスに着き空港の受付の方と会話を試みたところ、英語での会話の難しさに直面したことで故郷である日本が恋しくなっていました。 今回の経験でわかったことがあるのですが、自分は自分が思っていた以上に寂しがり屋であったことです。今回の事は寂しさが限界に達してしまっただけホームシックになってしまいました。しかし、家族に電話することで、その寂しさが和らぎ、その後の活動をすることができました。今後は、自分の寂しさが限界に達してしまう前に、家族や友達に電話をすることで、寂しさを和らげつつ生活することで、メンタルを保っていきたいです。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓	今回の活動から得た学びは、外に目を向けてみる事です。今までの私は、自分の町や隣町、県内のことなど自分の目の届く範囲でしか物を見ようとしていませんでした。しかし、今回の探究活動では自分の目の届く範囲を自分から広げて、活動をしてきました。当たり前のことですが、そうすることで見える物は異なります。今までは自分に都合の良かったことしか見ていなかったかもしれないけれども、都合の悪い物も見られるかもしれません。でも、そうすることで新しい物の見方などを獲得していくのだと思います。 次に、イギリスの方は外国からの観光客への対応力が高いということです。イギリスのスーパーで買い物をしているときの事です。セルフレジでお金を払い、お店から出ようとしたら、警報が鳴りました。慌てふためいてしまい、どうすることもできないでいると、お店の人が近づいてきて、センサーの取り外し方を優しく教えてくれました。そのとき、私は、海外に行くときはその国のルールや常識をしっかり身につけていくのと同時に、もし日本で海外からきた観光客の方を見たら優しくやり方を教えてあげられるように対応力の高さを高めるように思いました。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い お祭りを盛り上げるときに外国からの観光客が及ぼす影響が何か？
	活動内容 私は今回の活動を通して、イギリスのエディンバラフェスティバルやノッティングヒルカーニバルには自分を含めて外国からの観光客の方が多く感じました。今世界は飛行機の発達などでいつでも誰でも外国に行くことが可能になっています。そうした影響もあってか外国の観光客の方の数も多くなっており、その方達の影響で今まで以上にお祭りに参加する人数が増えることで結果としてその町にお金を落とす人たちも増えていると考えます。 外国からの観光客が多いお祭りを開催している町と、外国からの観光客が少ないお祭りを開催している町を比較することで、地域の経済的成長が本当にあるのかどうかを調べ、外国からの観光客が及ぼす、地域への影響を調べたいです。

(1)探究活動の問い		日本語と英語のバイリンガルを育てる教育とは！？
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		これをすれば必ずバイリンガルになれるという明確なメソッドがあると仮定した。なぜなら受験勉強においてはこの参考書を何周すれば英文法を網羅できるであったり、この単語帳にある単語を全て覚えれば〇〇大学レベルの入試に対応できるなど、おおかた明確なプロセスが示されていることが多いと感じたからだ。さらに、その膨大なプロセスをこなしてきた人が実際に志望大学に合格するなど、人生の先輩方が多くの成功体験を与えてくれていることも大いに説得力が増す。以上の理由からネット上では知り得ない⑧メソッドならぬものがあるのではないかと想定した。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	金沢国際交流財団が行っている「こども日本語ひろば」の見学をさせていただいた。この「こども日本語ひろば」は外国から金沢市に移り住んできた移民の子どもたちにマンツーマンで日本語を教えるというボランティア活動だ。この活動においては、先生としてボランティアの方を募っている。ボランティアの方々も、大学生～大人の方まで幅広い年齢層である。見学した日(2024年6月30日)時点では、5歳～18歳までの子どもたちが14名通っている。一人一人の習熟度に合わせて授業をしており、教材も充実している。この「日本語ひろば」は、単に日本語を教えるという目的だけでなく「居場所」としての役割も大きく担っているということに気付かされた。授業の中で日本語を学ぶのはもちろんのこと、日常的な会話を共有しながら対話することで、より実践的に日本語を使う練習にもなっているのではないかと考える。さらに、学校での悩みや人間関係の悩みを相談したりと、子どもたちの孤立感の解消にも繋がっているのではないだろうか。これらの学びから、子どもたちと密にコミュニケーションをとることが子供達にとって異言語を学ぶモチベーションにもなり得るのではないかと考えた。
	②留学中	オーストラリアにある日本語教室でボランティアをした。日豪ハーフの子どもたちに向けて日本語を教えた。主な活動内容としては子どもたちの補佐・備品の整理などだ。子どもたちとの距離感や接し方に戸惑いを感じつつも子どもたちと同じ目線で向き合うことを心がけた。ボランティア中に1番困った出来事を紹介したい。それは、ある女兒が機嫌を損ねてしまい授業に参加できなくなったことだ。しばらくすれば元に戻るかと思われたが、なかなか引きずっていた。そこで私は持参していたシールをあげることで少しでもモチベーションを高められるように努めた。このとき持参していたシールは少しでも子どもたちと仲を深めたいという若干の期待を胸に留学前に100円ショップで調達したものだ。購入当初の意図とは異なっていたが役に立てることができて嬉しい気持ちでいっぱいになった。起こりうる事柄を想定して必要な物事を考えることが大切だと改めて感じた。この想像力をこれからの人生にも活かしていきたい。最後に、このボランティア活動で得た学びや成果を紹介する。それは、同じクラスの中でも生徒一人一人での学びのスタイルや性格などが全く異なっていたことから個人に合わせたコミュニケーションをとることが大切だと改めて感じたことだ。これは普段の人間関係においても言えることではないだろうか。というのも、私たちは接する相手の性格などに合わせて言葉の言い回しを変えたりすることがあると思う。例えば、繊細で人の言葉を否定的に受け取ってしまう性格の友人がいるとする。その友人に何か指摘をしたと思ったとき、ダイレクトにまっすぐ伝えるのではなく、オブラートに包みながら伝えることを意識すると思う。これは一例に過ぎないが、対人関係における学びも多かったように思う。
	③留学後	留学中にとっていたノートを改めて見返して、ボランティア活動での学びを改めて整理し直した。それを元に最終的な問いに対する答え、新たな疑問などをはっきりさせた。そして、プレゼンテーションの 슬라이ドに落とし込んでいった。留学後に改めて探究活動に向き合ってみると新たな視点から物事が見えてきたことも多かった。
(4)問いに対する答え		日本語と英語のバイリンガルになるには母語を習得したのち、それぞれにあった勉強スタイルを確立すればよいと考える。この結論に至った理由は、「言語」そのものは表面上全く異なるように見えても、深層部分で共通しているところがあるからだ。これはある科学者が唱えた説である。この説から言えることは母語の習得で培ったスキルが他言語の学習にも繋がるということだ。言い換えると、母語の学習が他言語の学習の根底にもなっているということであると考え。先ほど「言語」には共通している部分があると述べたが、それと同時に独立している部分もある。共通している部分は学習や学術的な環境で必要とされる言語能力である。例えば、論文の読解・数学の問題の理解・抽象的な議論などがある。また、独立している部分は日常生活の中で必要となるコミュニケーションの部分である。このことから、「学習に使える」と「話せる」の両面をバランスよく伸ばす必要があると考える。特に子どもの場合は後者の習得が早く流暢にその言語を使いこなせると思われがちだが、「学習に使える」状態にまでサポートすることが大切なのではないか。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		上手くできたと思うことは情報収集だ。実は、現地でボランティア活動や現地の学校の見学を承諾して下さる場所を探すため、一から情報収集をしてメッセージを送った。初めのうちは、どんな学校やボランティア団体があるのかも未知数で、自分の探究テーマのための活動ができるか不安が多かった。結果トータルで5つ以上の学校やボランティア団体にかけ合った。インスタグラムやXなどの様々なプラットフォームを駆使して情報を集め、実際に英語でメッセージを送ってみたりと、自分自身の行動力も少しばかり称えたいと思う。さらには、現地での活動だけでなく留学前に日本でできることではないかと考え、日本国内・県内・市内・市内と幅を調整しながら少しでも多くの情報をキャッチすることに努めた。わからないからこそ徹底的に調べて、自分が必要な情報を抽出していくスキルを培うことができたと思う。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		ボランティア先や見学先を探すときに、1番行きたいと思っていたところに行けなかったこと。この要因は受け入れ先へのコンタクトが遅れたことにあると考える。そのため、なるべく早く行動に移し、スタートダッシュがきれいにしたい。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		1から自分で探究テーマを想起し、それを元にどんな活動をどこでするかを確認し、自分でコンタクトをとる。すべてのことを自らやり遂げることの大変さを知ることができた。0から1を生み出すことを体験することができた。また、自ら積極的に行動することでチャンスをつかむことも学んだ。言葉にして自分はこのにいるという声を発せない限りは、自分以外の誰かに自分の存在が知られることはない。だからこそ、自ら声をあげることで始めてチャンスをつかむことができるのではないかと感じる。今後の教訓としては自ら積極的に行動し感謝を忘れないことだ。今回も留学経験全体として言えることだが、もちろん私1人の力では到底叶えることができなかった。それは留学に限ったことではない。衣食住が守られ、学校に通い日常生活を送ることができているのは母をはじめとした周りの方々の協力があったからこそだ。人は1人では生きられないということを実感した。したがって、平日頃周りの人々や物事に生かされていることを忘れないでいたい。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みきたい探究活動	問い	多言語を操る人の脳内は何語????
	活動内容	今回の探究活動ではバイリンガルの言語学習について学んだが、3言語以上を操る人の脳内のメカニズムについてもさらに関心を持った。3言語以上を話す人々へのインタビューやトリリンガルを育てる機関でのボランティア活動をしていきたい。

(1)探究活動の問い		"伝わる"案内とは。中国人観光客の「困る」を体験した僕が中国に渡り"金澤"を変える！
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		実は中国人は中国語を使えない、中国人は日本語を翻訳して変な英語の翻訳を当てにしていないなど、中国人自らが不便を引き起こしているのではないかと。また、中国の翻訳サービスの質が良すぎるため、わざわざ英語を読まなくても、日本語を翻訳することで内容を把握しているのではないかと。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	中国人二十名にアンケートを実施し、なぜ日本語をわざわざ中国語に翻訳しているのか、英語を読めばいいのではないかと聞いた。すると、中国人はあまり英語を使えない人も多い、中国の生活において中国語のみで生きていけるから英語を使う場面が少ない、学校で学んだとしても実際に使える人は限られている、などの回答があった。また、日本に来るような富裕層の子たちは大体お金持ちなので素晴らしい端末によりなんでも解決できてしまうため、英語であっても日本語であってもそれを中国語にして翻訳して理解しているのではないかと、との回答もあった。
	②留学中	実際に中国で目にした現地の看板や様々なアナウンス・チラシなどからは、「伝えよう！！」という気持ちが日本のものの数倍伝わってきた。事実、中国では似たような商品も多く点在していて、ある大学の教授によれば自社の商品を買ってもらうにはわざと目立たせて気を引き、買ってもらわないといけないとのことであった。また日本の看板よりも文字が大きく、中国の場合は独特のアプリで生活が大体完結するため、アプリ内の注意を読めば、すべてのトラブルはなくなるようなものだった。また音声案内においては、とても聞きやすいイギリス英語が流れていて、日本人口調のわからない英語がなく、聞き取りやすい英語がベースとなっていることも知った。中国に行くまでの飛行機では、中国語と英語が聞き取りづらく、どこからが英語なのかわからない機内アナウンスが流れていたが、中国人が同じように日本のバスに乗ったらどこからが日本語でどこからが英語なのかわからないのかもしれない、と感じた。
	③留学後	様々な中国人と触れ合うにつれ、日本では中国のアプリしか使えないことを知った。中国人向けに作られたデバイスはグーグルなどのサービスを入れることができず、中国では使えたアプリも役に立たないと聞いた。また、唯一使えるのが翻訳アプリということも聞き、中国人が一生懸命翻訳アプリでその場を乗り切ろうとしている理由が分かった。中国ではアプリですべてが完結し、支払い、注文、トランスポートまでが一つのアプリで終わるのに対し、日本は現金社会であり、中国人が大変苦労する理由も分かった。
(4)問いに対する答え		中国では多くのアプリにより、当たり前前の生活が実現している。例えば、支払い、トランスポートなどであるが、それらサービスが日本にはなく、また多くのアプリは中国人がダウンロードできないために、中国人がわざわざ日本語を翻訳し、意味を理解していた。また中国人は日本の情報をあまり得られないまま日本に降り立ち、様々な壁を乗り越えて日本で観光を楽しんでいると分かった。中国人に伝わるような案内を行うためには、赤文字や大きな文字、光る文字を利用することで目立つようにし、わかりやすい表示を作る必要がある。もしバスでのアナウンスを製作する場合は、流ちょうな英語の導入により、様々な外国人観光客を助けられると考えている。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		外国人とのコミュニケーションが一番大きく、日本人がすごい人だと感じてもらえるように様々な人と関わり、様々な人と出かけた。日本人はシャイである、と言われることがこれまでの常識であったことから、それを覆すことができるよう努力した結果、友達も増え、日本人ってこんなに面白いのか！といわれるまでに成長することができた。中国において、自分を目立たせるように努力することは簡単ではなく、中国という多くの人がいる中で目立つ方法として、私は円周率などを役立たせた。自分が学んだのは、人にはない特技をどうにかして身につけておくことがコミュニケーションを円滑にするために大い役立つものだという点である。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		中国では現金を使えない。しかし、中国に行くまでにクレジットカードの契約が間に合わないなど、現地での決済方法について出発してからも不安であった。クレジットカードの契約は、留学を計画しているなら必須だと思うので、早めの契約をお勧めしたい。自分が失敗したこととして、分からない中国語があったときに英語に逃げたことがあげられる。この意味が分からないんです、などと言っていたら、もう少し自分の会話を広げられたかもしれないし、自分の伝えたいことを伝えることができたかもしれない。自分が困ることは大切だけれど、自分が困ったときに逃げる方法を知っていたせいで、中国語を最後まで使えない会話がところどころあり、少し後悔している。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		やってみないと分からないので、何でも試すことが大切であると改めて分かった。また失敗は思い出に変わるので、自分の失敗を何度も考えるのではなく、次々へと切り替えることも大切だと感じた。自分の能力を信じ、動いた先には必ず自分の成長があると感じられた留学であった。語学に関しても強く感じなおしたことがあった。感じたのは、伝えようとする意志があれば何とか伝わるということである。英語で伝えてしまう部分はあったが、自分が中国人の嫌う日本人であろうと、一所懸命に中国語を使うと理解しようと努力してくれた。日本人の場合もそうであるが、片言の日本語でも日本語が通じることがあるように、自分の中国語も同じであった。とりあえず話してみることが大事だと感じた。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	中国人が困らない決済方法を作る！
	活動内容	アリペイなどは日本でも使えない場所が多い。しかしペイペイとの連携で、使える場所も出てきている。交通機関において、毎回毎回切符を買うことは面倒くさいと感じるのも自分も分かる。だからアプリとしたいが、アプリは中国人が使えない場合が多かった。中国で多く使われているアリペイがあげられるが、このサービスと連携して支払い方法を確立させたい。アリペイとの連携は課題が多いと思うが、ペイペイとの連携ができてきている現在、可能かもしれないと考えている。アリペイに並ぶ、日本での決済手段を、スマホを使ってできるようにしたい。

(1)探究活動の問い		ニュージーランドと日本の発電の違いとニュージーランドから学ぶ日本のエネルギーのびしろは何か
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		地熱発電所の数が日本の方が少なく、発電方法も違うのではないかと
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	ニュージーランドの発電について調べて二国を比較するためには、まず日本について知る必要があると感じたので地熱発電について調べました。日本で主流な発電方法や発電所数や規模について勉強しました。
	②留学中	探究活動は主に二つ行いました。一つ目は地熱発電所の見学、二つ目は日本とニュージーランドの日常生活での節電意識などの違いを調べました。一つ目の探究活動としてタウポにあるワイラケイ地熱発電所に行きました。実際に行き見たり職員さんの話をきいて、日本とニュージーランドでは主に発電方法と土地の広さが違うと感じました。日本では現在、低温の地熱流体を二次冷媒とするバイナリー方式という発電方法が主流ですが、ニュージーランドではこのバイナリー方式に加えて、蒸気を直接利用するドライスチーム方式も広く普及しています。ドライスチーム方式はバイナリー方式と比べてエネルギー変換効率が高いので、日本でも普及してほしいと思いました。また、日本の方が人口密度が高いこともあり、ニュージーランドの方が土地が広く発電所が大きく数自体も多いとわかりました。日本の地熱発電をのばすためには、土地の確保や限られた土地でどう発電効率を上げるか考えることが必要です。また、現地での生活を通して環境にやさしい取り組みがあることを知りました。ニュージーランドには「Free hour of power」といって、電気代が一日一時間だけ無料になる制度があります。一時間無料になると電力を無駄遣いしてしまうのではないかと最初は思ったのですが、逆にその時間以外での節電意識が高まって総合的に見ると無駄な消費電力が少なくなっていました。日本でもこのような取り組みが導入されると節電できてエコ大国に近づくかもしれません。
	③留学後	留学を終えてから、私なりに日本の地熱発電を発展させるためにどうすればいいか考えてみました。留学中の活動で気づいた日本の土地の課題についての解決策を考えました。まず、日本にはもう残された土地は少ないので土地を確保するためには温泉や国立公園などの地熱資源が豊富な施設と共存する必要があると思います。しかし、発電所をつくるために周辺地域の住民の方の協力が必要だったり、景観を損なわないように発電所を見た目に工夫をしたりしなければいけないという課題もあるので、どう工夫するのか考える必要があります。また、限られた土地で発電効率を上げるために他の再生可能エネルギーを利用した発電と組み合わせるといいと考えました。例えば、地熱を利用してバイオマス発電をしたり、熱を冷却するときに小水力発電を同時に行うこともよいのではないかと思います。このようなアイデアを実現するためにこれからも勉強し続けていきたいです。
(4)問いに対する答え		ニュージーランドと日本の発電は、主に発電方法と土地の広さが違う。日本のエネルギー自給率をのばすためには、ドライスチーム方式などの発電方法を普及させたり、日本の土地をうまく活用する方法を見つけたりすることが必要だ。また、エコな国づくりという観点で、消費者が電気を無駄遣いしないようにすることも必要だ。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		ほぼ計画通りのスケジュールで探究活動を行えたのがよかった点だと思います。また、勇気を出して現地の職員の人に話しかけることができてました。そのおかげで新しく情報を得られたし、なにより英語で会話できたのが成長を感じて嬉しかったです。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		天気がよくなくて、予定していた活動がいくつかキャンセルになってしまったのが少し心残りです。天気予報を確認してスケジュールを組む段階で晴れの日にいくようなスケジュールにしたり、途中でスケジュール調整したりすればよかったのではないかと反省しています。もし次の機会があれば、もっと臨機応変に活動をしたいです。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		探究活動を進める中で、多くの知識を持つ専門家と意見を交換したり同じ分野の方の考えを調べたりすることの重要性を感じました。自分一人で完結するのではなく、職員の方とのコミュニケーションを通じて、より深い理解を得ることができました。今後の活動でも、他者の意見を積極的に取り入れ、協力しながら進めることの大切さを意識したいと感じました。また、探究活動を行う中で、英語が通じなかったり天候がよくなかったりとうまくいかないこともありましたが、その経験から学ぶこともありました。失敗を恐れず、むしろ失敗を次のステップへの糧として活かすことが大切だと感じました。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	地域社会に適したエネルギー自給自足の方法は何か
	活動内容	この活動では、地域社会が再生可能エネルギーを活用してエネルギー自給自足をめざす方法を探ります。地域の特性を活かし、どのような再生可能エネルギー技術を組み合わせることで、他国からのエネルギー依存を減らし、地域経済の持続可能な発展に繋がるのかを調査します。土地の広さ、気候、人口などの要素がどう発電に影響するかを調査し、日本の各地方に最も適した発電方法を提案できるようにしたいです。

(1)探究活動の問い		日本では「癒しの音」と言われている箏の音色だが、他国でも癒しを与えることができるのか、イメージはどのようなものなのか。
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		箏の音色は、比較的穏やかで、柔らかな波長を持っており、人間の聴覚に心地よく響きます。そのため、リラックス効果が高まるとされています。そして、自然界の音、たとえば、風や水の流れ、鳥のさえずりなどと似ているとも言われています。こうした音は、人間が本能的にリラックスさせるため、箏の音色をきくことは、心の安定をもたらす、ストレスを和らげる効果があると考えられています。よって、海外の方にとっても「癒しの音」になるのではないかと思います。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	まずは、箏の音色について、日本人にアンケートを行いました。箏の音色に癒しを感じるのか、他にどのような印象を持つのかを調査しました。また、学校にいらっしゃる外国人の先生に、初めて箏の音色を聞いた時の印象を伺ったり、ミニ箏に触れて、演奏を体験していただきました。
	②留学中	まず、ミニ箏を使ってEFシドニー校の先生や生徒、ホストファミリーに実際に演奏を聞いてもらったり、触れてもらったりし、箏に興味を持ってもらいます。そして、アンケートを行いました。次に、予定よりも、海外の方が少なかったため、語学学校の近くにある広場や公園に来られていた方々に街頭アンケートを行いました。
	③留学後	アンケートの集計を行いました。そして、それぞれの結果をもとに共通点と相違点を分析しました。箏のことを知っている人はごくわずかでしたが、知っている人の多くは、アニメを通じて知ったことがわかりました。そのため、伝統文化というものは、単体で作用するものではなく、多くの物事を通じて繋がっているということがわかりました。
(4)問いに対する答え		日本人だけでなく、海外の方に対しても、箏の音色は「癒しの音」に近いようなイメージを持ってもらえることがわかりました。100人の方にアンケートを実施した結果、「箏の存在を前から知っていましたか。」という問いに対して、日本人90%が知っているに回答したのに対して、海外の方は17%の方が知っていると回答しました。数字だけ見ると少ないように感じられますが、17%の方が日本の文化を知っているということに私は感激しました。実際に多かったイメージとしては、、美しい、落ち着いた、心地よい、ゆったりとしているなどがあがりました。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		街頭アンケートを行うとき、積極的に声をかけ、答えてもらうことができたことです。オーストラリアにいる方々はとても紳士的で、声をかけると嫌な顔ひとつせず、私の下手な英語をどうにか聞き取ろうとしてくれました。その国民性に救われ、街頭アンケートを無事に終えることができました。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		はじめは、ホストファミリーや語学学校の先生や生徒にアンケートを行う予定でしたが、日本人が多く、海外の方とのコミュニティがあまり多くありませんでした。そこで、近くの広場や、公園などに集まっている方々にアンケートを行うことになったことです。人がいないからと諦めるのではなく、自分にできることを達成する力を身につけました。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		私が今回の留学を通して学んだことは、失敗を恐れないということです。私は、留学をする前は、現在通っている学校での授業では、できる限り失敗した発言をしないように心がけていました。しかし、そうではなく、失敗したとしても積極的に発言し、間違えたところはその場で修正していくことが大切だということがわかりました。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	音楽は、人の心をどれだけ変化させることができるのか。
	活動内容	さまざまな国の方に、色々なジャンルの音楽を聞いてもらい、それぞれどのような印象を与えるのかというアンケートを行いたいです。そして、結果を分析に、共通点や相違点はあるのか、また、なぜそのように感じられたのかを調査していきたいです。

(1)探究活動の問い		トルキスタン地域における日本語教育はどのようなものか。ウズベキスタンと石川、それぞれの文化の独自性と共通点は何か。
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		ウズベク語はチュルク諸語の一つであり、文法が日本語と近いため、それを活かした日本語教育が行われているのではないかと考えた。シルクロードを介して両地域間につながりがあったのではないかと考えた。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	<p>現地の日本語教育機関や日本語教育の現状について調べた。ZOOMで、のりこ学級校長やウズベク人のボランティアの方々から、現地の「のりこ学級」で行われている日本語の指導方法等について伺った。ここで得た知見を元に、現地での日本語教育について自身の計画を立てることができた。</p> <p>ウズベキスタンの伝統工芸品を調べている中で、リシタン陶器が九谷焼に似ているように感じ、5月4日に開催された九谷焼茶碗祭りに行き、色彩や装飾に類似点がある考え、リシタン陶器との共通点を探った。シルクロードをモチーフに九谷焼を作っている職人さんがいたことから、シルクロードを通して両国に関係があったのではないかと考えた。</p>
	②留学中	<p>現地での日本語教育機関で実際に日本語の授業や日本語弁論大会のスピーチ原稿の添削、指導を行った。日本語学習者や日本語教師と交流して、生の声を聞くことで、日本とウズベキスタンの日本語教育の違いや共通点や理解することができた。また、授業をする中で、ロシア語を使う生徒が多くいたことから、ウズベク語が母語だという一律の指導では、生徒の日本語への理解に格差が生じてしまうと感じた。伝統工芸品の比較については、リシタン陶器の工場だけでなく、マルギランやタシュケントの工場、博物館などにも訪れ、そこで見た芸術品から西洋と東洋、双方の美的感覚が見受けられた。→シルクロードを介した広い範囲の文化交流を感じた。</p>
	③留学後	<p>留学中に得た資料や情報、感じたことを整理し、留学での学びをプレゼンテーションにまとめ、クラス内と後輩の前での発表を行った。また、現地で収集したリシタン陶器と九谷焼の比較を行い、両者の共通点と相違点を論文にまとめ、今後の活動の計画を立てた。</p>
(4)問いに対する答え		<p>授業を通して、文法的な類似性を活かしつつ、ウズベキスタンの文化や習慣に合わせた日本語の指導がウズベク語を母語とする生徒に1番効果があると分かったが、ロシア語を母語とする生徒がおり、一律の指導では生徒の日本語への理解に格差が生じてしまうと知った。工場や文化施設の見学を通して、ウズベキスタンのリシタンと石川の両地域には、確かな共通点が見られたが、歴史的な繋がりは未だ不透明なため、今後の活動でさらに探究していきたい。</p>
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		<p>現地でのインタビューや交流、実際の日本語の指導を通じて、生きた情報を収集できたこと。</p>
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		<p>現地でのインタビューにおいて、ロシア語を母語とする方とのコミュニケーションで言葉の壁から、十分な情報を引き出せない場面があった。今後は、ロシア語を学ぶとともに、事前に質問内容を明確にし、伝えたいことを簡潔にした上で、話そうと考える。</p>
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		<p>異文化理解には、事前の情報収集だけでなく、現地での体験や交流が不可欠であることを学んだ。また、多角的な視点から情報を分析することで、より深い洞察が得られることを実感した。今後は、ウズベキスタンでの留学経験を活かし、大学で留学生や地域の在日外国人との異文化理解を深めるための活動を行いたい。</p>
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	<p>ロシア語を母語とする生徒には、どのような日本語指導を行えば、理解を深めることができるか。</p>
	活動内容	<p>ウズベキスタンのタシュケント東洋学大学に留学し、ロシア語を学ぶとともに、日本語学科の日本語の授業を見学して、効果的な指導方法を模索する。</p>

(1)探究活動の問い		アメリカのホームレスとアルコール依存症、麻薬依存症の関係は何か
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		仕事を失った人や株で失敗した人などが、絶望から麻薬やアルコールに手を出してしまい、結果として依存症になり再就職することもかなわず、ホームレスとなっていたのではないかと予想した。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	現在ロサンゼルスで行われている貧困支援策を知るため、インターネット、文献調査を行った。 生活必需品の配布や資金援助の支援があり、生存に必須であるが一時的な助けにしかならないと感じた。 また、日本とロサンゼルスの貧困者を比較した。両者の属性は異なり、ロサンゼルスの貧困者の約50%はアルコール、麻薬依存症である。原因として人生への悲観、あきらめが挙げられ、この根本的要因を取り除くことが貧困脱却の糸口ではないかと考えた。 現地での取材を円滑に進められるよう貧困に関する専門的な英単語の学習に取り組んだ。
	②留学中	ボランティア先でボランティア活動に実際に参加し、配布活動やホームレスの人とコミュニケーションを取ることで、実態を調査した。また、職員の方にインタビューを行い、なぜホームレスになってしまうのか、また依存症との関係性、貧困からの脱却に必要な事は何かと思うか、ということをお聞きした。意外な返答が多く、ほとんどの職員の方が、支援が足りないのではなく、その支援を受ける人次第だと言っていた。支援金を受けとって麻薬やアルコール、ギャンブルで使い果たしてしまったり、もう一度元の生活に戻るよう努力していない人も多しとおっしゃっていた。いくらボランティアや政府自治体が支援をしようと取り組みを行っても、その人に貧困から脱却しようという意思がなければ効果はないので、難しいと言っていた。
	③留学後	インタビューしたことをまとめ、インターネットでさらに調査を行った。アメリカ政府はホームレスへの支援金を多く配布しているものの、未だにホームレスの数は減ることなく増え続けている。お金や食べ物を配布するだけでは、貧困から脱却を後押しできていないのではないと思う。インタビューからもわかる通り、多くのホームレスは依存症に陥っているため、まずは依存症を回復することが先決なのではないかと考える。
(4)問いに対する答え		ホームレスになってしまったがために依存症になってしまった人、依存症になってしまいホームレスになってしまった人など一人一人背景が異なっていた。インタビュー結果からもわかるように、アメリカでのホームレスとアルコール依存症や麻薬依存症には深い関係があると言える。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		職員の方へのインタビューをちゃんと行うことができるか不安だったが、みなさんととても優しくたくさん質問に答えてくださった。用意していなかった質問もいくつか追加して聞くことができた。またボランティア活動中もボランティア仲間に話しかけ、アメリカでの暮らしやおすすめの観光地、食べものなど日常的会話を行うことができた。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		指示されたことがわからず、戸惑ってしまい、割り当てられた仕事を終わらせるのにとても時間がかかってしまったことが何度もあった。わからなかったら、一人で悩まず、周りの人に聞くなり、もう一度聞き直すなど、積極的に行うべきだったと思う。次に何かボランティアをすることがあったら自分から積極的に行動したいと思う。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		ためらわずに、いろんな人にインタビューを行ったり実際に活動に参加することで、予想していなかった答えを得ることができることがあるため、聞けるだけ多くの人に質問すると良い。必要に応じて質問を変えたり、柔軟性をもって質問をするとうい。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	依存症から抜け出すのに必要とされている支援は何か
	活動内容	インターネットで実際に行われている依存症回復のための取り組みを調べる。またどの支援方法が一番効果がありそうか、またアメリカだけでなく他国でもどんな取り組みがなされているのか調べる。

(1)探究活動の問い		美しい海からこれからの千里浜について何が学べるか
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		マルタは美しい海と呼ばれているがそれは国が積極的に活動しているからか、国民が積極的にボランティア活動をしているからだろうか
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	マルタの海事情について調べたがあまり詳しいことは出てこなかった。千里浜の現状は漂流ごみがちらほらとあった。
	②留学中	まずは、マルタの海に行きごみの有無を見た。近くのビーチに行ったがペットボトルが一本しかなかった。だがこれは、漂流ごみではなく恐らく地元の人が捨てたものだった。次に、アンケート調査をした。ビーチにいる人に基本的に声をかけておこない様々な意見が聞くことができた。観光地のビーチにも行った。観光客が多いのでごみが多いと思ったが、全くなかった。私が調べて思ったことは、ごみ箱が設置してあるからポイ捨てをする人が少ないこととペットボトルのリサイクル機で一石二鳥となっていることである。ごみ箱に関しては日本は事件があってからあまり設置はしていないが、ゴミ箱があることでポイ捨てする人が減り街がきれいになるので限定して設置すると思う。リサイクル機はマルタではコンビニ、スーパーマーケットに必ず1台はあり、ペットボトル、ビンが入れられ1本につきそのお店の割引券がもらえる。ごみ捨てでもでき割引券ももらえるので魅力的だ。
	③留学後	マルタにあったペットボトルのリサイクル機を地元のスーパーマーケットで似たものを見つけた。割引券がすぐもらえるわけではないがポイント制でためる方式だった。割引券がもらえるほうがすぐ使えるし、わかりやすいので導入したい。
(4)問いに対する答え		美しい海からこれからの千里浜について学べたことは、環境は国で守られており国民もほとんどが意識をして生活していた。そこから、千里浜も環境に関するルールをはっきりと設定し広めることが必要と考えた。また、ごみ箱やリサイクル機の設置を進めて環境に配慮したまちづくりも必要だと思う。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		アンケート調査はうまくいった。ビーチにいる人に話しかけたがほとんど人が答えてくれ、日本のお菓子も無事渡せた。朝方より夕方のほうがみんなゆったりと過ごしているのでもうまくできた。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		アンケート調査はうまくいったが、一度断られるとその次に進めなくなり苦戦した。そのときは海に入るなど別のことでリフレッシュして対処した。しかしまずは、一度でくじけない精神を作っていかなければならないと感じた。そのために、日頃からポジティブに思考をする意識をちょっとずつ成長していく必要がある。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の探究活動で、美しい海で有名なマルタでは環境は国で守られており、ほとんどの国民が意識して過ごしていた。このことから学んだことを、これからの千里浜のためにちょっとずつ現在の状況をいろんな人に知ってもらい協力していくことが大切だと考える。そのために私も少しでも力になれるように取り組んでいきたい。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	環境保護を促進するためにできること
	活動内容	環境保護をみんなが自発的に、そしてもっと促進するためにできることを様々な国から学ぶ。それぞれの国の環境についての法律や国民の意識を調べる。

(1)探究活動の問い		ドイツは、なぜ住みやすい街と思われているのか～これからの石川の街づくりに貢献する～
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		ドイツの住みやすい街と思われる点として、1つ目は、ドイツが「ボランティア大国」と呼ばれるほどボランティア活動が盛んで、街のいろいろな問題を解決するために民間ボランティアが積極的に動いていること。また、その際には専門家が居ること。 2つ目は、環境先進国として自然環境や公共施設が整っていて、公園や街路樹、歩行者専用の空間などがしっかり整備されていること。 3つ目は、建物の中の用途を変えながら活用し続けて、街の景観に統一感を持たせて歴史ある町に仕上げていること。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	都市デザインに興味を持っており、インターネットで調べていてドイツのミュンヘンという街を知った。そこから、その美しい景観に惹かれ、ドイツの街づくりやミュンヘンの街について調べる機会が増え、特にインターネットや本を通して、ミュンヘンや同じドイツのフライブルク、他の都市デザインについて調査した。フライブルクもミュンヘンと同様に、インターネットで都市デザインを調べていたところ素敵なデザインの町であったので興味をもち調べた。
	②留学中	留学中は、4つの活動を考えていた。1つ目はボランティア活動である。ドイツでの社会貢献を通して、街を知りたいと考えていた。街の植栽を豊かにするボランティアに応募して実際に参加させてもらえることになった。しかし結果は、天候に恵まれず、活動に参加することができなかった。2つ目は、ボランティア団体の方へのインタビューである。これは結果的に2回お話を伺うことができた。1回目は環境系のイベントで、様々ボランティア団体のブースがある中でお話を聞くことができた。事前に考えてきた質問を聞いたり、お話を聞く中で疑問に思ったことをその場で英語で聞くこともできた。2回目は、実際のオフィスでお話を聞くことができた。活動中の資料を見せてもらうことができ、貴重な経験ができたと思う。3つ目は、ドイツのフライブルクで生活している日本人の方へのインタビューである。実際の生活や歴史など教えてもらい、フライブルクについて生の声を聴くことができた。4つ目は、フライブルクで生活する人たちのインタビューである。アンケートの表をドイツ語で作成し、シールを張ってもらうスタイルで多くの人の協力が得られた。
	③留学後	ドイツで行ったインタビューや、自分自身が現地で感じたこと、さらにアンケート調査の結果をまとめた。そして、それらを留学前に自分が立てていた仮説と比較し、その仮説が正しかったかどうかを検証した。インタビューでは、現地の人々がどのような考えを持っているのかを直接聞くことができ、アンケート調査では、より多くの人々の意見を集めることができた。
(4)問いに対する答え		これらの経験から、結果としてほとんど仮説通りであったといえる。ただ、予想外であったこと(仮説通りでなかった部分・想定外であった部分・新たに気づいた部分等)も多くあった。例えば、ミュンヘンでは、脱車社会がより進んでいたと思っていたけれど、実際日本と同じような課題を抱えていたことや自転車の利用率は高いが、その置き場がきちんと整備されていないことなどである。フライブルクでは、踏切がなく、人々の意識にゆだねていたり、路駐が全くなかったり、日本ともミュンヘンとも大きく違っていた。また、現代では公共空間がありつつも、その空間は車や電車の音で快適とは言えない騒音がある。しかし、フライブルクでは日常的な生活でそれを感じない空間を実現していることにも気がつくことができた。これらのことから、住みやすい街とは、端的にいうと人間らしく生きられることだと思った。政府や誰かに頼るのではなく、住民一人一人の積極性とその仕組みづくりで交流と生きがいに貢献し、住民が真の自然豊かな環境で落ち着ける公共空間を作り、そして、土地に根差す文化や慣習、考え方を特に都市づくりをする専門家が理解していることが大切だと思った。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		フライブルクで住民に対してのインタビュー活動で、初めてであったがうまくいった点がある。それは、事前にインタビュー活動のやり方を調べたことである。分かったことは、座っている人に話しかけに行った方が回答率がよいということで、その方法を実践した。その結果、約80%の確率で回答をもらうことができ、安心した。もう一つは、インタビューに答えてくれた人にお礼として日本のお菓子を配ったことである。喜んでもらえ、日本のことを知ってもらえたことがとても嬉しかった。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		留学先でボランティア活動に参加することを計画していたが、実際には思うように活動先を見つけることができなかった。そして、ようやく見つけたボランティア活動も天候の影響で参加できず、悔しい結果となった。うまくいかなかった原因は計画不足であったと思う。現地に到着してからボランティアを探し始めたため、十分な情報収集ができていなかった。また、事前に連絡を取るべき相手や組織をリストアップしていなかったことも、活動先を見つけるのが遅れた理由であると思う。このことから、新しい環境での活動には事前の調査や準備が欠かせないことを痛感した。次回は、事前に現地のボランティア団体に連絡を取ることで、同じような問題がおこらないようにしたい。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		今回の留学を通じて、私は異文化の中で生活し、コミュニケーションを図ることの重要性を学んだ。語学学校や探究活動を通じて、多様なバックグラウンドを持つ人々と意見を交換する機会が多くあり、これが異文化理解に繋がった。今後は、この学びを活かし、コミュニケーションを図ることで、より多様な視点から物事を考える力を伸ばしていきたいと思った。また、私は計画と準備の重要性を痛感した。特にボランティア活動の件で計画不足が課題となったことを教訓に、今後は事前により詳しく調査を行い、現地の情報をしっかりと把握してから行動するよう努めたい。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	住みやすい街とは何だろうか～ドイツの都市デザインの実務から学ぶ～
	活動内容	今回は自分が生活し、一市民の視点として街のデザインについて考えてきた。もし次に活動を行うとするならば、実際に現場で働いている人のもとで自分のスキルアップを目指し、より住みやすい街を目指し貢献したい。街が抱えている課題やそれについてのアプローチ方法についてより詳しく学びたい。

(1)探究活動の問い		フランスではどのような過疎化対策が行われているのか
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		フランスでは、観光用レジデンスへの投資が積極的に行われており、地域活性化区域という一定の基準を満たした地域は様々な優遇制度を受けられる制度もあるので、その効果で過疎化は改善されているのではないかと考えた。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	全国のトピタ生、同じ習い事の友達やその親、小学生が多く集まる場所や中高生が多く集まる場所でアンケートを行い、「過疎化の解決は必要か」「過疎化にどのくらい関心があるか」を聞いてまとめた。ボランティア活動で能登を訪れ、過疎化の現状を再確認した。テレビや本で日本の過疎化の現状や対策について調べた。
	②留学中	① 街頭アンケート フランスでは過疎化は日本ほど重要視されている問題ではなく、人々の関心も薄いこと、日本は過疎化への危機意識が高いことがわかった。日本とフランスでは意識の違いが見られた。 ② 過疎地の調査 フランスのカステルノール＝レで調査を行った。人口は少ないが、子どもの数は一定数いることから、日本は少子化による過疎化、フランスは人口流出による過疎化が多いことが分かった。 ③ 観光案内所への取材 なぜモンパリエは観光客が多く訪れる？という質問には、ロケーションが良いから。バカンスの時期に特に観光客が多い。どのような種類の観光施設が人気？という質問には、歴史のある建物、城や教会、オペラハウスなど。自然が豊かで歴史のある建物が多いのは石川県も一緒。フランスではバカンスに過疎地に行く人が多いため、観光客が訪れやすい。季節に合わせた地域の魅力を見つけることが大切だと分かった。
	③留学後	留学で得た成果を、石川県主催の留学フェアや全校集会などで行った。また、留学体験発表会では優良賞をいただくことができた。
(4)問いに対する答え		モンパリエは過疎化は進んでおらず、逆に観光客が多く困っている地域だった。なので過疎化対策を調べるのではなく、人口や観光客が多い理由を調べる方向に転換した。観光案内所への取材から、「季節に合わせた地域の魅力を見つけること」が観光客を集めるのに効果的なのではないかという結論に至った。モンパリエは海に面していて私が留学したときはバカンスの時期だったので特に観光客が多く訪れていた。バカンスの時期に遠くの地域からモンパリエの海を目的に遊びに来る人が多いことが分かった。なのでモンパリエは毎年観光客数が多く安定している。石川県でも「この季節になったら石川県に行きたい」と思ってもらえるような魅力を見つけることが大切だと思う。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		自分から積極的に話せたこと。ホストファミリーとお茶を飲みながらその日あったことを話したり、海にピクニックにいったり仲よくなったのが嬉しかった。また語学学校で様々な国の友達を作ることができたことも嬉しかった。英語で会話するのは慣れていないし緊張したけど積極的にコミュニケーションをとれた経験は自信になったし、もっと英語を勉強しなくてはいけないと思うきっかけになった。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		計画的に探究活動をできなかったこと。2週間しかない中、なかなか生活に慣れず初めの1週間は毎日過ごすのに必死になり、探究活動を行える余裕が無くなってしまった。計画を変更して、帰国するぎりぎりまで探究活動を行わずにはいけなくなり、時間のやりくりが大変だった。少し余裕をもって計画を立てて何もしない日などをつくり修正を簡単にできるようなスケジュールにしたら防げたことだと思う。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		諦めずに、行動してみる。取材をしたいと思った観光案内所にメールを送っても返信が無く困っていたが、このままでは何もできないと思いアポなしで訪問したところ優しく対応してくれたから。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	過密地域の問題点は何か？
	活動内容	東京や大阪などに住んでいる人から問題点を聞きたい。過疎化の解決と過密化の解決は関係性があると思うので、留学で得た学びも活かし、その二つの問題にアプローチできるような解決策を考えたい。

(1)探究活動の問い		世界にはどのようなカフェがあるのか？どんなカフェが人気なのか？
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		・朝からコーヒーだけを飲むためにカフェを利用する人が多い→営業時間に工夫が有るのではないか・チェーン店のカフェが少なく、個人経営にカフェが多いのは、1店舗ごとの独自のメニューがあるのではないか。・インテリア、内装、外装、サービスなど、それぞれ違う工夫が有るのではないか。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	国内の15か所以上のカフェへ行く。バリスタ用語、コーヒー豆の種類を勉強する。そうすることで、現地のカフェと比較することができる。
	②留学中	一日2か所を目標にカフェに行く(19日間で25か所以上のカフェへ訪れた)。店員さん、利用しているお客さん、学校の友達、先生にインタビューする。
	③留学後	日本のカフェへ行き、もう一度違いを観察し、ニュージーランドのカフェにあって日本のカフェにはないものまたはその逆などを考察する。現地で実際に行ったカフェをファイルにまとめる。
(4)問いに対する答え		ニュージーランドと日本のカフェの大きな違いの一つは、『それぞれのカフェが多様性を追求している』という点や、カフェの営業時間が大きく異なるということです。また、各店舗ごとに看板メニューが異なり、どのカフェにも独自の特色があることも大きな特徴だと思いました。このことから、カフェを石川で開業するにあたって、ニュージーランドのカフェがそれぞれ独自のテーマやスタイルをもっているように、日本でも多様性を取り入れること、営業時間を朝早くからにすることで、新たな客層を開拓することが大事だと考えます。『独自性を重視すること』『ライフスタイルに寄り添う柔軟なサービス』を取り入れることで、魅力的で個性あふれるカフェを石川で展開できると考えました。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		現地のカフェで実際に注文する際、事前に下調べや勉強をしていたおかげで、自分が欲しいものをあらかじめきめておくことができ、スムーズに注文することができました。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		おすすめのカフェについての情報収集は、主に語学学校内の友達や先生、ホストファミリーへのインタビューが中心で、現地のニュージーランド人へのインタビューは少なめでした。現地の人と関わる機会が少なかったのも一因ですが、バスや道で話しかけてくれる人がいた際に、その流れで質問すればよかったと感じています。留学後半には積極的に質問できるようになりましたが、留学前半はまだ恥ずかしいがあり、うまく話しかけられなかったことが反省点です。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		下調べの重要性を実感するとともに、物おじせずに話しかけてみることの大切さ。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	カフェを開業するにあたってどんな経験が必要なのか？バリスタ資格の習得方法はどのようなものか？
	活動内容	実際にカフェで働くことで経験を積んだり、カフェを開業した人とともに働くことでヒントを得る。

(1)探究活動の問い		ビーチリゾートとして有名なゴールドコーストに人が集まる秘密は？
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		年中海に入れて天気の良い日が多いといったマリンスポーツに適した気候を活かして様々な企画を催したり、都市部にある利点を活かして交通面でアクセスを良くするための工夫を行っているのだろうかという仮説。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	<ul style="list-style-type: none"> ・道の駅のと千里浜で観光客の方々へアンケートを実施。 ・羽咋市役所商工観光課の担当者の方と打ち合わせをしてオーストリアで調査してほしいことを聞き、能登、羽咋市の現状を聞く。
	②留学中	<ul style="list-style-type: none"> ・サーファーズパラダイスでビーチ付近の方々にアンケートを取る。 ・アンケートの結果(40人回答) <ul style="list-style-type: none"> 【千里浜海岸を知っているか】 97.1%知らない 2.9%知っている 【車で走れるビーチに魅力を感じるか】 感じる82.9% 感じない17.1% 【サーファーズパラダイスで一番なのは】 最多(イベント) 【サーファーズパラダイスにあって他のビーチにないものは】 きれいな砂浜と波、多くのレストランやアイス屋さん 【海の近くに建ててあげたいものは】 パブ、トイレ、カフェ、アイス屋、ナイトクラブ 【能登半島地震を知っているか】 知っている37.1% 知らない62.9% 【車で走れるビーチでやりたいイベントは】 カーレース、車内上映会、車の展示会、ストリートパフォーマンス大会など 【サーファーズパラダイスでいちばん有名なイベントは】 航空ショー、元日の花火 【何が一番の日本文化ですか】 最多(食べ物) ・留学先からメールでやりとりしながら、調査結果を羽咋市役所商工観光課の担当者の方へ随時報告。
	③留学後	最終結果をもとに市への提言を作成し、今後の羽咋市の千里浜にできる取り組みについて相談をしている。
(4)問いに対する答え		ゴールドコーストに人が集まる秘密は都市部と海の近さ、そして航空ショーなどのとても豪華なイベント、海の前から街にかけて広がる大規模な商店街、道路を走るトラムという路面電車やバスなどの頻度がとても高い交通手段などが答えとして考えられる。また、商店街を詳しく見るとアイスクリーム屋が徒歩3分圏内に約8つほどあり、需要の多いアイスクリームを売るところが多かったことや海の見える位置におしゃれなレストランやカフェがあるのも理由として考えられる。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		アンケートを答えてくださった方は自作の折り紙のセットを配るととても喜んでくださって答えてよかったと感じていただけたようだった。また、質問の内容を細かく指定したことで様々なことを聞くことができた。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		10人に1人位のペースでしか答えていただけず、1日に約5人にしか答えてもらうことができなかった。原因の一つにQRコードでアンケートをとろうとしていたのが逆効果だったのかもしれない。現地の方は意外にもスマホを持っている人がとても少なく、断り文句なのかは分からないが今持っていないという方もいて苦労した。答えようとしてくださる方は比較的年配の方が多かったのでQRコードの読み取り方法がわかっていない方がとても多かった。そのため、スケッチブックに書いてもらうかマークしてもらうのがいいだろうと思う。そして謙虚に話しかけに行ったがそれも逆効果だった。日本ではそのほうが良いとされているが海外では怪しまれてしまうことが多いと知った。探究活動の終盤ではハイテンションで気さくに話しかけに行くことが成功することが多かった。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		日本での常識や日本で学んだことは海外では普通とされないということに改めて痛感した。しかし、環境が変わってもそこに適応してアイデンティティを見出すことが大切であり、情熱を持ちそれを相手に伝えることも大切だと学んだ。そして、現地で会ったトビタテ生と一緒にアンケート活動をすることでアンケート方法を互いに共有し、アンケートをより良いものにつつ同じ境遇の人と活動することがモチベーションにつながった。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	能登を活性化させるために千里浜でできることはなんだろうか？
	活動内容	千里浜を活性化させるイベント、取り組みを企画し、それをするために協力して下さる方を探す。

(1)探究活動の問い		石川県で盛んな発酵食品はカナダでどれくらい広まっている？石川県の知名度はどれくらい？
(2)問いに対して留学前に立てた仮説や想定した答え		カナダのヴィーガン、ベジタリアン率は世界で9位(2022年)であり、健康的な食品が広がっている。また、カナダはその多様性により様々な食べ物が食べられている。今回重点においた日本発祥の野菜のぬか漬は栄養面において健康的であるため、カナダでも広く食べられているのではないかと考えた。
(3)問いに対して実際に行った活動内容とその成果 ※具体的に記載してください。	①留学前	祖父母が自分たちで生産したきゅうりやかぶ、ナスなどを使った漬物を作り、朝市などで売るといって商売をしている。現地で実際に漬物を作って振る舞うため、祖母にぬか漬の漬け方を教わった。
	②留学中	現地のスーパーと日本食スーパーへ行って、ぬか漬が置いてあるのか調査。 スーパーはバンクーバー内にあるスーパー4店へ行った。そのうちの1つのオーガニックスーパーに黄色の沢庵が売っていた。 日本食スーパーにはカップラーメン、おかしがほとんど置いていない。クラスメイト、ホストファミリー、計40人ほどにインタビュー。国籍は、フィリピン、ベトナム、韓国、台湾、メキシコ、フランス。 ①石川(金沢)について知ってるか？ 台湾人2人は、能登半島地震の件で知ったそう。残りの人は全く知らない、聞いた事もない。 ②日本のぬか漬を食べたことがあるか？ 8人(台湾人、韓国人がほとんど)食べたことある(自国で食べた)。残りは人は、そもそもぬか漬を知らない人と、匂いが苦手という人が半々くらいだった。ぬか漬を実際に行ってインタビューした人に食べてもらう。ぬか床を忘れてしまい、スーパーには売ってなかったため無印良品が販売しているぬか床を求め無印良品へ行ったが置いていなかった。そのため、ネットで見つけた味噌とヨーグルトを混ぜたレシピで代用。スーパーで買ったきゅうりで浅漬を作った。味はぬか漬とほとんど同じ(ヨーグルトのおかげでまろやかめ)。ピクルスと似ていておいしい、食べやすいと言ってくれる人が多かった。酸味が少なければ食べてもらえると思った。
	③留学後	味噌とヨーグルトを混ぜる代用のレシピを祖母に食べてもらい、本来のぬか漬とどう違うか、味の感想をもらった。
(4)問いに対する答え		思っていた以上に広がっていない。漬物に関しては、そもそも取り扱っているスーパーが少なく、オーガニックスーパーなど限られた場所にしか置いていなかった。クラスメイトやホストファミリーにもベジタリアンがおらず、健康意識を持っている人を対象にすれば結果は変わっていたと思う。
(5)活動する中で、上手くできたことや成功したこと		どのスーパーへ言っても日本の漬物が見つからなかったときに、オーガニックスーパーへ行ってみようと思いつくことができたのは良かったと思う。またぬか床を忘れてしまったが、代用のレシピを見つけれられて、無事振る舞えたことはよかったと思う。
(6)活動する中で、上手くできなかったことや失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		肝心のぬか床を忘れたこと。計画的に早くから用意すればよかったのに、直前に用意したため忘れてしまった。日常生活でそういうことが多いので、改善しなければいけない。代用のレシピでは、本来のぬか漬よりも少しだけ酸味が弱くまろやかだったため、振る舞ったときの反応に影響が出ていると思う。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		石川県の発酵食品に繋げることが難しかった。今回ぬか床の代用として味噌とヨーグルトを使ったが、味噌を加賀味噌にするなどをもし出来たらより良かったと思う。事前の計画と完璧な準備が大切である。
(8)今回の探究活動を踏まえ、次に取り組みたい探究活動	問い	ベジタリアンを対象に、漬物はどれくらい食べられているのか？
	活動内容	オーガニックスーパー、ヴィーガン食品を取り扱うスーパーへ行って調査。インタビューや漬物を振る舞う対象もベジタリアンやヴィーガンに限定する。ぬか床は石川県の特産品であるがばら寿司にも使われる米ぬかを使用する。

(1)探究活動の問い		多民族国家シンガポールにおいて、英語を共通語として教育していくことの課題は何か？ その教育方法を知ることで、日本の英語教育向上につながる点はあるか？
(2)問いに対して留学前に立てた仮説 や想定した答え		学校での英語の授業に大きな違いがあるのではないか。
(3)問いに対して 実際に行った活動 内容とその成果 ※具体的に記載し てください。	①留学前	日本での英語教育の現状を知るために二校の小学校の英語の授業を見学させてもらった。ALTの先生に日本の英語教育に足りていないと思うこと、能力としてもっと伸ばすべきだと感じることを聞いた。それらを通して日本の英語の授業では日本語の使用がとても多いこと、先生が中心の授業であること、またALTの先生はスピーキングが課題と感じていることが知ることができた。
	②留学中	英語の授業を受けてきた。英語の授業では日本語を使うことが一切禁止されていて、わからない単語があろうが英語で英語を学んだ。日本で受ける英語の授業と大きく違ったのは英語の使用量だと感じた。また現地の先生に日本人の留学生に対して欠けていると感じる英語能力は何かをアンケートで聞いた。その結果として一番多く見られたものがスピーキング力だった。英語の教育方針を変えていく必要があるのではないかと考察できた。シンガポールでは家庭教師を雇い、自宅でも英語学習をしていることを知った。総合的に見て英語に触れる機会がとても多いのだとわかった。
	③留学後	日本とシンガポールでの経験を通しての体験を比較してまとめた。英語の使用量に大きな差があり、教育内容には大きな差はなかった。文法などを中心にした授業内容であることに変わりはないが、それを教える際に使う言語の違いが見られた。また、生徒が発表する際も英語の使用だった。発言の機会も多かった。英語にたくさん触れることが英語能力の向上につながっていると考察した。
(4)問いに対する答え		日常においての英語に触れる機会がとても多いからだと考える。また、教育者の英語能力がとても高かったと感じた。
(5)活動する中で、上手くできたこと や成功したこと		日本のALTの先生とシンガポールの先生の両方にアンケートを取ることが良かった。日本でALTの先生にアンケートを取ったときは口頭でのアンケートだったが、その際に、正確な質問内容を伝えること、正確に回答してくれたことを転記するのが難しいことに気がついたので、シンガポールでアンケートを取る際にはアンケート用紙を自作して聞いたことが良かったなど思っている。そのおかげで正確に意図を伝えられた。
(6)活動する中で、上手くできなかったこと や失敗したこと ※その要因と改善点も記載してください。		留学前は日本の小学校の英語の授業を見学させてもらえたが、シンガポールでは小学校の授業を見学させてもらうことができなかった。現地に行ってから、ただの留学生が授業見学するアポを取るのはいさぐく難しかった。改善点としては渡航前にアポを取ってもらうこと、そしてその際には通っている学校の方やトピタ関係の大人の方々の力を借りて身元と見学理由を明確にすることが挙げられる。
(7)今回の探究活動から得た学びと今後の教訓		探究するときは自分の身を持って体験することが大切であることを知った。探究していく中で言語を学ぶ新しい方法を知ることができた。英語をたくさん使うことによって実際に私自身の英語能力があがったことが実感できて、これを日本の英語教育の場に自分が持ち込んでいきたいと思った。今後は探究する際には自分から体験して自分でギャップを感じることを実践していきたい。
(8)今回の探究活動 を踏まえ、次に 取り組みたい探究活動	問い	第一言語ではない他言語をその他言語のみで教えたときと第一言語混じりで教えたときの学習度の差はどうなのか。
	活動内容	日本語を第一言語が英語の人である程度日本語を知っている人に英語使用のみで教えたときと日本語を使って教えて、学習度の差をテストを用いて測る。